

情動コンピテンスと大学生生活充実感の関連についての研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1313020 押田 竜馬

1. 研究動機・研究目的

近年、長引く厳しい経済雇用情勢や国際的な経済競争の激化など、現代の若者は厳しい時代を生きているが、その大半が現状を悲観しているというわけではなく、現在の生活には満足している者が多い(厚生労働白書-若者の意識を探る- 2013年)。

大対(2004)は、「学問の地ということだけに留まらず、学生が大学生活を充実して送り、社会に出るまでの十分な準備を行えるようにサポートするという役割をも担う」と述べており、大学生活を充実して送る事は重要である事が伺える。また、大対(2014)は、大学生活の充実感を規定する要因として、学業以上に友人関係への満足が重要であると示している。

友人関係への満足を高める能力は、「情動知能(Emotional Intelligence)」に含まれているとしている(豊田 2007)。さらに、Saklofske et al.(2003)は、情動知能の高さは、人生満足感と関連することが示している。以上から、情動知能は大学生生活充実感と関連があるのではないかと考え、本研究に着手した。

また、小学校または中学校から、高等学校または大学までスポーツを継続している大学生は、一般大学生に比べて情動知能指数が高いことが明らかにされている(高木ら 2008)。これは、スポーツ活動が情動知能に与えるプラスの影響を示唆するものである。

そこで、本研究では、部活動に所属する大学生と、所属しない大学生を比較検討し、情動コンピテンスと大学生生活充実感の関連を明らかにしていく。

2. 研究方法

本研究では、本研究の目的である、情動コンピテンスと大学生生活充実度の関連について調査するために、情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版と大学生生活充実度尺度短縮版の項目を使用した。情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版は、「情動コンピテンス自己域」「情動コンピテンス他者領域」2因子 20項目から構成される。回答方法は5件法(非常にそう思う⑤から全く違うと思う①)とした。大学生生活充実度尺度短縮版は、「大学へのコミットメント」「交友満足」「学業満足」「不安のなさ」の4因子 21項目で構成される。回答方法は5件法(非常によくあてはまる⑤から全くあてはまらない①)とした。また本研究では、フェイスシートも用いて検証を行った。

3. 主な結果と考察

「情動コンピテンス自己領域」と「大学へのコミットメント」「交友満足」「不安のなさ」には弱いながらも相関が示された。また、「情動コンピテンス他者領域」と「大学へのコミットメント」「学業満足」にはほとんど見られなかったが有意な正の相関が示され、「情動コンピテンス他者領域」と「交友満足」「不安のなさ」には有意な弱い正の相関が示された。

さらに、「大学へのコミットメント」「学業満足」得点に関して、部活動に所属する大学生と所属していない大学生において有意な得点が得られた。

4. 結論

理論仮説①として設定していた「情動コンピテンスと大学生生活充実感には相関がある。」については、「情動コンピテンス自己領域」と「大学へのコミットメント」「交友満足」「不安のなさ」には弱いながらも相関が示された事、「情動コンピテンス他者領域」と「大学へのコミットメント」「学業満足」にはほとんど見られなかったが有意な正の相関が示され、「情動コンピテンス他者領域」と「交友満足」「不安のなさ」には有意な弱い正の相関が示された事から、おおむね理論仮説①は支持されたといえる。

また、理論仮説②として設定していた「大学生生活充実感は、部活動に所属する大学生と所属していない大学生で異なる。」については、「大学へのコミットメント」「学業満足」得点に関して、部活動に所属する大学生と所属していない大学生において有意な得点が得られた事から、部分的に支持されたといえる。

しかし本研究においては先行研究との不一致、サンプルの偏りなどの問題点があった事から、今後は丁寧に調査を進めていけばより一層、理論仮説②が支持される結果が出るかもしれないと考える。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究に際し、御指導を頂いた水野基樹先生に深く感謝申し上げます。スポーツ経営組織学ゼミナールの院生の皆さんには、論文の執筆にあたり貴重なアドバイスを頂きました。特にお忙しい中でも、親身になってアドバイスをいただき、ときには厳しいお言葉をかけていただいた、岩浅さん、中島さんをはじめ院生の方々には大変お世話になりました。

はじめに卒業論文を書き始めた際は全く進まない状態で、水野先生をはじめ、たくさんの方々にご迷惑をおかけしました。しかし、先生、院生、先輩方からご指導いただいた事で、どのような研究がしたいのか、どの部分をオリジナリティーにしていくのかなどの道筋を立てられたのは、私を支えてくださった皆様のおかげだと思っております。

また、卒業論文を完成させるまでに、たくさんの方々からお力添えや励ましのお言葉をいただきました。アンケート調査に協力していただいた大学生の皆さんには本当に感謝しております。

今後は、卒業論文執筆を通して学んだ事を胸に、社会で活躍できるよう、誠心誠意精進して参ります。